移民第二世代青年期のエスニシティ間比較（３）

－ブラジル系ニューカマーの事例－

鳥取大学　児島明

１．目的

ブラジル系ニューカマー第二世代に関する従来の研究は学業不振、不就学、進学困難等に注目するものが多かった。だが他方、義務教育以降の青年期をどのように生きているかについては、すでに次世代の育成に携わる者さえいる現状があるにもかかわらず、十分な検討がなされてきたとは言い難い。本研究では、アメリカ移民第二世代を対象としたポルテスらの研究（2001＝2014）を手がかりとしながらも、北米とかならずしも同じ文脈を生きているわけではないブラジル系ニューカマー第二世代の青年期のありように注目する。

樋口（2005）は、親戚など顔見知りのつてを頼った「相互扶助型移住」と、斡旋業者などが介在した組織的移動形態としての「市場媒介型移住」に分類することで、日本の実態に即した移住の説明が可能になるとしている。デカセギ斡旋業者を媒介としたブラジル系ニューカマー第一世代の来日は、後者の典型と位置づけることができるだろう。「市場媒介型移住システム」に組み込まれることにより国家間移動や来日後の地域間移動を繰り返す親をもつ第二世代にとっては、自発的ではないかたちでなされた移動の諸結果とどのように向きあうかが青年期の大きな課題となる。本研究では、第二世代が経験する移動の多様性および移動に対する意味づけの変容過程を、日本に特有の受け入れ文脈とのかかわりにおいて明らかにする。

２．対象と方法

ブラジルにルーツをもつ 20 代半ばから 30 代前半の若者 10 数名を雪だるま式に集め半構造化インタビューを行った。対象者は日本生まれもしくは就学前に来日した者が過半数を占める。

３．結果

継続中の本調査から、第二世代が非自発的な移動の諸結果といかに向きあうかに関して、以下のような諸点が見出されている。第一に、頻繁に繰り返される非自発的な移動は、第二世代にとって経験の断片化をもたらしやすい。言語能力、家族関係、友人関係、就学、仕事、アイデンティティなど、直面する課題は置かれた状況に応じてさまざまであるが、移動がなにかしらの欠落や喪失の経験を生みだす点では共通している。しかしながら、第二に、そうした欠落や喪失の経験は固定的なものではなく、新たに積極的な意味を獲得する方向へも開かれている。その際、移動という経験に積極的な意味を付与しうる機会や場が存在するか否か、そして、そうした機会や場へのアクセスが可能な状況にあるか否かが、その後の経験を大きく左右する。第三に、第一世代については、「市場媒介型移住」であることによる移民コミュニティ形成の困難とその必要性が論じられてきたが、そうした状況下での成長を余儀なくされた第二世代には、その世代に固有の経験にもとづく移民コミュニティとの距離のとり方が見受けられる。

文献

樋口直人, 2005,「移住システムと移民コミュニティの形成―移民ネットワーク論からみた移住過程」梶田孝道他『顔の見えない定住化―日系ブラジル人と国家・市場・移民ネットワーク』名古屋大学出版会.

Portes,A. & R.G.Rumbaut, 2001, *Legacies: The Story of the Immigrant Second Generation,* New York: Russell Sage Foundation.（＝2014,村井忠政他訳『現代アメリカ移民第二世代の研究－移民排斥と同化主義に代わる「第三の道」』明石書店.）

謝辞　本研究は科学研究費補助金基盤研究（B）26285193 の助成を受けたものである。